

六月五日、コムソモリスク駅出発

六月八日、ハバロフスク

六月十一日～十六日、ナホトカ

六月十九日～二十二日、西舞鶴

六月二十三日、自宅到着

二カ月間休養して体調を整え、九月より新制中学校教諭として平田村立平田中学校へ勤務することになった。

抑留生活での地獄と極楽

和歌山県 松本博文

大正十四年三月十日出生。三歳のとき父を亡くし（警察官であった父は日置で釣居中、事故死したため、顔も覚えていない）、七歳のとき母と別れ伯父の家で養育を受け、農学校卒業後、朝鮮総督府の穀物検査所に就職。昭和十七年一月十日、釜山支所に赴任。昭和十九年十月十日、現役兵として羅南奏二一一五四部隊

歩兵中隊に入隊。一期の検閲後間もなく二十年四月上旬、北鮮訓^{くんじゅう}戎^{じゅう}まで行軍、陣地構築に挺身。途中北鮮の古茂山^{こもさん}を通過するとき、西林中尉殿に「おい、松本君ではないか」と声をかけられ、驚きと嬉しきでいっぱいであった（紀南農学校の園芸の先生）。

連日、訓戎の陣地において蛸壺掘りをする事三カ月余、八月に入り飛行機の飛来しきりとなり、焼夷弾を落とし始めた。「これはおかしいぞ、ただごとではない、ソ連と開戦だ」ということで、弾薬を取りに行くやら大慌てで鉄橋を落したり道路を破壊したが時既に遅く、二～三日後、ソ連軍が怒濤のごとく川（豆満江）を渡り押し寄せてくる様子が肉眼でも確認できた。日本軍は兵器もなく（私は本来四一山砲であったが、弾丸など皆無）、小銃は三人に一挺ぐらいではどうにもならなかった。

陣地を捨て本隊に戻ると、今まで攻撃の続いていた砲声がはたとやんだ途端、日本は降伏したとの情報を初めて知る。時は八月二十二日ころで、終戦から一週間くらい過ぎていた。

翌日、戦死した友軍の屍を弔う（焼く）ため、二百人くらいでそれぞれ手榴弾一発ずつ持つて出掛ける。屍は陣地の尾根筋に足の踏み場もないくらいに散乱し、修羅の世界を初めて見る。しかしソ連軍のため意を果たさず、着のみのまま捕まる。そこで本隊員と共に琿春において武装解除、監禁される羽目となる。

隊内には半島出身者（特別志願兵）、特に下士官級が多数含まれていた。また、在満の応召者も多く満語が通じるので逃亡する者多数。私も逃亡を誘われ、相当躊躇したが、やはり原隊と運命を共にすることに決めた。今にして思えば、あの時の決断こそまさに運命の分かれ目であつたと痛切に感じている。

監禁中、夜になると車のヘッドライトと激しい銃声が聞こえるので、これは全員銃殺されるのではと身の縮む思いであつたが、それは囲いの外で逃亡した者が全部射殺されていた。それは何百人にも及んだ。翌日、逃亡して射殺された者の埋葬をソ連軍に命ぜられ、我々もわが身を保ちかねている中、死者の弔いをした。その後もあの広い琿春の炎天下に十日間ぐらい監禁さ

れるうちに、アミーバ赤痢、栄養失調で倒れる者続出。自分もアミーバ赤痢にかかり、間もなく病人のみ車で囂（とら）們に移された。このとき、本隊と別れることとなる。病人は薬などがなく、毎日バタバタ死んでいった。次は自分の番だと思つたが、若さのせい、かろうじて持ちこたえることができた。

正月も過ぎて一月、寒いさ中、列車で日本に帰してやるということで北鮮の古茂山に戻され、古い社宅に収容された。ここでは健康な者はセメント工場で働かされた。我々半病人は毎日仕事はなく、暖をとるための燃料の調達に監視兵つきで薪（生木）取りなどをする。

この間、入浴もなく、食糧は穀物のごくわずか入つた「かゆ」のようなもの、皆これを「ワダー」と言つた（ロシア語で水という）。このような状況の中で、ひなたぼっこ、シラミとりをしながら死んでいった者また緑の野草（毒ゼリであつた）を食べて死んでいく者が後を絶たなかつた。

毎日全員集合、人員点呼がある。また、三日に一度

は逃亡者（ここでは邦人の在鮮、在満応召者が多かった）を処刑するからと全員を集合させ、目の前で射殺する。それは少ない日で二人くらい、多い日は十人くらい。これらの逃亡者は、朝鮮の保安隊に捕らえられソ連側に引き渡されたものである。我々もまさに薄氷を踏む思いの日々であった。

次に南の方に移動、うれしい日本に近づくと言いで貨物列車に乗せられ、ちょうど五月で稲の苗代の種まきの頃である。着いたところは清津港である。日鉄の社宅に入り約一カ月間、船への積み込み作業である。もっぱら米であった。最後に積み込んだ船に乗船し北上、着いた所はソ連領ポセットである。（昭和二十一年七月ころ）

ここで貨車に乗り換える。また日本への希望はあきらめる。貨車は西へ走り続けること二十日間、今度着いたところはカザフ共和国レノゴルスクという高原の街。標高三千八百メートルくらい、日本の富士山より高い所だという。まだ八月というのに雪がちらついた。ここでは甜菜、馬鈴薯、トマトなどの除草作業で

ある。ある日、一列に並んで畑の草を取りながら進むと、向こうからも同じ作業をしている組あり、よく見るとドイツの捕虜である。通訳を通じて休憩中、片言、手まねで話すと、どうやら日本は日ソ不可侵条約をまじめに守り過ぎた、もっと早く極東で対ソ宣戦しておればソ連は手を挙げたこと間違いないと、しきりに残念がる。農場は馬鈴薯、トマトなどあり、何かと我々にとってありがたかったが、二カ月ほど過ぎて次は煉瓦工場に移る。十一月ごろである。煉瓦を造る土を練るのも足で踏む、そして型枠に入れ乾燥して竈かまどに入れて焼く。

やがて真冬となり、気温は零下五〇度に下がったことがある。初めて体験することだ。鳥の声も虫の声も聞こえない。シーンとする真夜中のようである。そのころは石山で建築基礎用のグリ石集めの作業である。あまりの寒さで現場では、栄養失調も加わり、次々と倒れて意識を失う。意識がなくなれば轎こしに乗せられて収容所に帰るが、そのときは、手も足も顔も凍傷にかかり「ダルマ」のようになる。あれは絶望だったろう

と思う。

作業から帰ると毎晩、足に巻く靴下ならぬ布切れである。これをペーチ力で乾燥して翌日靴を履かないと必ず凍傷になる。私も左足の踵と小指の下にまだ跡形が残っていますが、やられました。かかり初めだったので医務室で休ませてくれたが、次々と凍傷患者が増えてきたので、凍傷にかかれば足布の乾燥を怠ったためと営倉に入れられるようになった。夜、馬鈴薯の皮むきなどに行つて帰ってくると部屋が暖かいので、つい足布を乾燥するのを忘れると翌日は絶対凍傷になる。

二十二年の一月ころ、レニノゴルスクの高原を下りて（徒歩）着いたところは、炭坑の街キシロフスクである。ここはレニノゴルスクよりはるかに暖かく、炭坑の街のせいか活気があった。三交代制の石炭掘りの作業である。食糧も十分の上、給料もあり、過去の一カ年余とは打って変わり、生氣を取り戻した。ちょうど小隊長（寒川某）も和歌山県人（東牟婁か）であり、図們で知り合った印南町の久保田助三郎氏とは生きて日本に帰ることを誓い合うなど、いろいろとお世話に

なった。

炭坑の仕事も種々あるわけですが、このキシロフスクでは通常縦坑百メートルくらい地下に下り、横穴何百メートルか分かれて奥に入り、八時間交代で炭層を発破で碎いて坑外にトロツコで搬出するのであるが、私たちの仕事はベトンと言って、左官のするような坑道の修理作業に従事した。この仕事は、坑木で崩れた横穴を修理しコンクリートで固める。そのため材料の持ち込み等坑道の入口付近を出たり入ったりするので、奥に入りきりの本来の石炭掘りよりも比較的楽であった。もちろん落盤でもあれば、どちらもそれまでで陀仏ですが。

ノルマの基準は、初めのころ、セメントの消費量により評価されたので、時々セメントの粉を地下水の流れている溝に流した。するとセメントは楽々消えていった。かくしてノルマ達成、監督「ヤポンスキー（日本人）、ラポート（仕事）、ハラシヨー、ハラシヨー（良好）」と喜んでくれる。しばらくこのことを続けているうちに、地下水の溝の末流にセメントが溜まり

発覚したが、大したお咎めもなかった。しかし、それで今度はノルマの基準をコンクリートの打設した体積

（立方メートル）によることになったため、またもや一緒に働いているタタール人やソ連人にパローラ（石炭になりかけのもの）をトロツコで運んできてもらい、コンクリートの胴に入れ、表面のコンクリートはごく薄いのだがそれに気づかず、総立方メートルは伸び、ハラショーだ。またしても楽々ノルマを達成することができた。共に働いていた一般の女の人（タタール人、ロシア人）も我々と同様に給料は多くなり大喜びであった。監督は朝と夕方姿を見せるだけで、あとは日本人に任せきりであった。同郷の久保田君と「これならもう日本に帰りたくないな」と冗談話をしたこともある。

食足り、給料も貰えるようになったのでようやく人間性を取り戻した。そこで花札、マージャンなどによる博打も盛んになった。また強制的に天引貯金もさせられたが、帰還するときは没収された。

監視兵や監督（我々の直接関係する）にまつわる滑

稽なこともありました。

① 坑内に入る時は充電された電池を持って入る。

（大体八時間以上可能）ただし、中には八時間もない不良品もある。そんなとき監督に「バッテリーニエット（ない）」と言うと直ちに「ダワイ」と言ってくれ、縦坑を昇って収容所に帰り、その日は休める。そこで、三交代のため予め下番の友人と打合せておき、交代ですれ違ふときバッテリーを交換して坑内に入る。すると二時間もしないうちに次第に暗くなってくる。このことを監督に告げると「ダワイ、アデハーチ」となる。ただし、これはあまり頻繁に繰り返してはばれる。適当にしなければならぬ。

② 次は監視兵のことだが、朝夕収容所を出入りする時の人員点検が彼らはなかなか勘定がきづづらいらしい。五列縦隊に普通並ぶのであるが、前から一列ずつ数えていく途中、隊伍の者が少しでも動くときまた初めから数え直す。最後にどうしても数えられなくなると、今度は十列に並ぶよう命ずる。このよう

だから、作業場へ出発するときは、なるべくぐずぐず（作業時間が短くてすむ）、反対に現場から帰るときは積極的になちんと整列して時間をとらせないようにする（早く帰って休養できる）。

③ 「モスクワ」はどの辺りにあるのか知らないと言った。しかし東京は知っていた。

④ 日本に太陽が二つあると言うと驚いていた。

⑤ 作業場までの往復、監視兵から「ヴィストラ、ヴィストラ」（早く、早く）と聞かされ通しなので頭にくる。日本語で何と言うか尋ねたから「遅く、遅く」と教えた。すると、教えたとおり急ぐ必要のあるとき「遅く、遅く」と連呼する。その結果、気分的にも少し楽であった。

昭和二十三年も暮れ近く寒い冬が訪れ十一月となり、ここキシロフスク収容所生活も二カ年となる。ある日、監視兵が「ヤボンスキー、東京ダモイだ」と言うのでまた騙されたかと思っていたが、今度は本当であった。二、三日して帰還が実現した。

帰還の貨車に乗るとき、二年間一緒に働いたタター

ルやロシアの婦人も「ヤボンスキー、ダスヴィダーニア」（日本人、さようなら）と見送りに来てくれた。

愛別離苦というか、人情は敵、味方、国境を超越する思い。

ナホトカ經由で乗船帰還したのであるが、ここで三〇四日間は民主教育の総仕上げといった感じで、いろいろ帰還手続の合間、「赤旗の歌」など歌うやら、スクラム組んで「ワッショイ、ワッショイ」と大いに氣勢を上げた。皆、日本に無事帰るためのものが多かった。

民主化が不十分として、また伐採の収容所に戻されたグループもあったと聞く。

乗船して、ちょうど日本海の真ん中辺にさしかかったとき、甲板で何か騒々しいので何事かと上つてみると、在ソ中、良い目をした連中（アクチブ）らで活動した者、というわけで「吊るし上げ」である。船員もけしかける。散々吊るし上げの末、四〇五人、海中に放り込まれるのを見た。

① 一番苦しかったのはやはり終戦後、在鮮中の最初の

一カ年でした。氣候にも慣れず、食糧不足と栄養失調で生死の境を彷徨したときです。反対に、キシロフスクの二年間は収容所生活としては極楽であつたと言えましょう。

② ソ連兵の知能程度が低かつたため、人員点呼などでは随分長時間立たされたが、その他の面では比較的気楽であつたのではないかと考える。

③ 引揚船で吊るし上げられた者も、抑留中、ソ連側の要求にだれかは応えなければならぬ存在とするなれば気の毒な感もする。

懐かしの日本の土を踏んだのは、昭和二十三年十二月三日（永徳丸）であつた。四〇五日後、郷里の伯父さん方へ帰り、農業の手伝いなどしているうち、早田仁君（一年後輩、当時食糧事務所勤務）のお世話により二十四年十月、農林省和歌山統計事務所印南出張所（当時、作物報告事務所）に入所。翌二十五年、百合子と結婚、伯父の家を離れて独立する。昭和五十八年十二月、定年退職。その間、二男を養育。

現在 長男 大阪近畿銀行勤務

次男 大阪において自動車販売修理（自営）
爺婆夫婦二人で梅栽培に専念中です。

シベリア抑留

島根県 足立 光雄

昭和十三年三月、三刀屋尋常高等小学校を卒業し、母の実家において魚介類販売に従事。母、姉の三人暮らし（父は別居中）。昭和十七年魚介類が統制となり、関東州大連市（父の居住地）の満鉄子会社に就職中、昭和二十年五月、臨時召集により間島省延吉市の通信隊に入隊、無線通信に従事した。通信器材は普通であつたが、小銃は三人に一丁くらいで、交戦用武器は「ゼロ」に等しかった。

昭和二十年八月九日朝、非常呼集で分隊編制、延吉市郊外に無線通信隊として一個分隊八名くらい（？）で戦闘配置につき、終戦までその態勢で、終戦と同時に